

人物で語る 日本デンマーク

⑭ みずがみでんぎぶろう 水上傳三郎

山崎町神明社南の道路に隣接して水上傳三郎の銅像があり、台地や西鹿乗川一帯の低地を見下ろしている。

傳三郎は一八六五年（慶応元年）十一月、傳藏とよりの長男として生まれ、温厚実直で向上心が旺盛であったといわれ、学業に励みながら少年時代を過ごした。

傳三郎の家は山崎村のしやう屋を務めるほど裕福な家であったが、傳藏が土地購入のトラブルで多くの資産を失い、そのため、傳三郎は十七歳で家業を継いだ。

その時の資産は、田八反歩、畑一反五畝歩、宅地八畝歩であったという。それ以後傳三郎は日夜農業に励み、山林を開墾したり土地を購入したりして、二十数年後には田三町余りを所有するまで資産を増やしていった。

昭和初期の水上家の経営規模は、

- 家族労働 四名
- 家畜 牛一頭
- 耕作面積 田三町五畝歩、畑五反歩（その

内クワ畑三反歩）

● 作物 米三町五畝歩、麦二町二反歩（裏作）

レンゲ五反歩、一町四反歩（裏作）

ダイズ六畝歩

● 野菜 サツマイモ五畝歩、テンジクマメ

一畝歩、ダイコンほか三畝歩

● 養蚕 春・夏・秋の三回

となつてゐる。いわゆる多角経営で、四角形農業ということになる。

このような経営ができたのは、耕うんやもみずりに畜力を導入して労力の省力化をはかり、経営の合理化に努めたからであった。年間収入は、三千三百八十三円十二銭で、支出は一千六百六十一円八十銭ということで、純利益は二千二百円余りに達している。このことからしても、傳三郎は日本デンマーク農業を支えた一人であり、精農型農家の典型といえるよう。

一方、傳三郎は山崎村若衆連のリーダーとして活躍した。また、後継者を育てるために村の青年に横屋（別棟）を開放し、人生を語



▲水上傳三郎の像（山崎町）

ったり山崎延吉の農業経営の仕方を話したりした。時には、個人的な悩みを聞いたり、相談相手になったりして、彼らに夢と希望を与え、指導者として信望が厚かったという。

一九一〇年（明治四十三年）には、これまでの活動や実績が認められ、安城町農会の副会長に就任し、一九一五年（大正四年）三月まで務めた。この間、町農会の幹部として指導力を発揮すると共に、新しい農業経営の普及に努めた。また、一九二五年（大正十四年）三月から十年余り安城町収入役の要職にあった。

傳三郎は、一九三四年（昭和九年）九月、七十歳の生涯を終えたが、勤儉いぢぢずの人であった。山崎町の住民は、一九三五年（昭和十年）三月、傳三郎の遺徳をしのび、銅像を建立した。撰文は山崎延吉がしたため、山崎町在住の鈴木福太郎が浄書した。今も傳三郎の銅像は、変わりゆく安城の地をじっと見つめている。

文 稲垣維晃



▲撰文 山崎延吉
書 鈴木福太郎